

剣 生

No.233

題字 元会長 大沼与兵工氏



グループ 活動紹介 196

職人町獅子舞は約三〇〇年の歴史を持ち今日に至っているもので、新発田開祖の溝口侯の命により獅子舞で、神前における悪魔払いの技術を京都から習得させたと伝えられております。またこの獅子舞は、その間一時も途切れることなく現在まで継承されている伝統芸能であります。笛は稲妻・大太鼓は雷・付太鼓は雨を表し、これを打ち鳴らして獅子が奮迅の勢いをもって悪魔を退散させると云う勇壮な舞であります。例年八月二十七日から開催されます新発田祭り(諏訪神社祭)の中で行われております。

平成十五年には新発田市指定無形民俗文化財第一号として指定を受けております。

現在は職人町においても他地域同様空洞化が進み、戸数の減少が見られる上若者の減少もある中で、伝承継続に毎月第三土曜日を研修日と定め、町外からの協力も得て継承に努めています。

(後藤 博)

私の人生体験

～ 新たなる地域づくりへの挑戦 ～

あ、イバラトミヨだ！



若月 学

平成十四年夏、新発田市で絶滅したと考えられていたイバラトミヨが新たに発見された瞬間です。

イバラトミヨは新潟県の五泉市が世界的な南限とされる陸封型のトゲウオの一種で、日本国内では新潟以北に生息し、一部では天然記念物にも指定されています。

新潟県レッドデータブックでは、絶滅の危険性が最も高いとされる「絶滅危惧Ⅰ類」に指定されており、当時、新潟県内では五泉市と中条町（現胎内市）

でのみ生息が確認されていました。

今では、新発田市の生息地でもイバラトミヨを保全する活動が行われています。

イバラトミヨが生息する意味、新発田市におけるイバラトミヨの発見が私の人生にどう係わってきたのか、少し時代を遡り、順を追ってふり返ってみたいと思います。

大学進学、そしてUターン

さて、私は高校を卒業後、名

古屋市内にある大同工業大学（現・大同大学）へと進学しました。

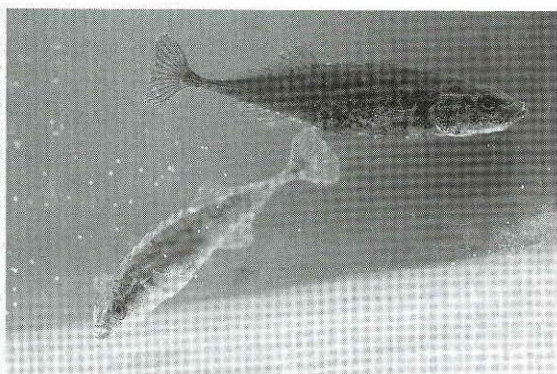
大学では工学部建設工学を専攻、家業である粗朶の特性を研究したかったのですが、『粗朶など時代遅れである』と一蹴され、やむなく鉄鋼スラグの有効利用に関係する研究を行ったのが思い出されます。

大学卒業後は新潟に支店を有する建設会社に就職し、幾つかの県内企業への転職を経て家業である『粗朶屋』若月建設を継ぐ事になりました。

実家に戻ってからは、集落の青年会や地元消防団に所属し、地域の自治活動に取り組み始めました。数年もすると地域にも馴染み、気持ちに余裕が出てくると今度は自分の社会的立場から地域の為に何かできないかと考えるようになったのです。

加治川ネット21の立ち上げ

立ち上げの切っ掛けとなったのは、平成八年に新発田藩開城



四〇〇年・新発田市政五〇周年を祝う記念事業の企画を募集しているという情報を得たことでした。

時を同じくして平成八年十一月、河川法が改正され、治水、利水に『環境』が加わり、それまで防災一辺倒で整備されてきた護岸を固める川づくりから、生き物にやさしい「多自然川型づくり」へと時代は大きく変わり始めていました。

そこで、二級河川加治川の河川環境に注目し、有志を募り、これからの河川環境のあり方と加治川の活用をテーマとするシンポジウムを開催することにしたのです。

「水辺のシンポジウム」と銘打って行われた記念事業の基調講演では、当時の近自然型工法やビオトープという概念など、河川環境の先駆者であった新潟大学教授 大熊孝先生にご講演をいただきました。

また、講演後の討論会では、日本ビオトープ協会副会長や旧建設省北陸地方建設局河川課長

などその道のプロフェッショナルの方々をパネリストに迎え、河川環境に関するディスカッションを行いました。

私たちは、この討論会を契機として、「ふるさとの川・加治川」の新しい価値観づくりを模索し始めたといえるのではないのでしょうか。

地域づくりから 付加価値づくりへ

発足当時は「環境」ごみ拾い」というイメージしかなく、内の倉ダム湖畔や加治川河川敷のゴミ拾いから始めたように記憶しています。平成九年、冒険家・作家のC・W・ニコル氏と知り合い、平成十年には新発田市民文化会館でC・W・ニコル「人と自然」くあなたは、子ども達に何を残しますか？」という講演会を開催しました。

この講演会をきっかけに入会した会員も多く、専門性の高い会員が増えたことよって活動の幅がグッと広がりました。

あれから十年、水辺環境の調査活動や学校での環境教育の支援活動などを積み重ねて来た結果、今では加治川流域全体で活動を行い、新発田市、聖籠町を巻き込んだ小学生による環境学習発表会なども開催することが出来るようになりました。

新発田地域には豊かな自然環境が残されています。でも、地域の環境は、その存在が身近であればあるほど意識されにくく、保全が難しいのが実情です。だからこそ、イバラトミヨなど小さな生き物に光を当てながら、目に見える形で地域環境の現状を伝え、自然環境の大切さとその保全活動の重要性を訴えていかなければなりません。

これからも様々な活動をとおして仲間づくりを続けながら地域の自然環境を保全していくこと、それが私自身の選んだ新たな地域づくりへの挑戦なのです。

